

いそご
壱十五の神社と祭り

「^{いそご}壱十五の神社と祭り」発行に寄せて

横浜市磯子区民文化センター杉田劇場
館長 中村 牧

祭りは地域をつなぎ、次世代に継承されていく大事な伝統文化です。

わがまち磯子にも、それぞれの地域、町内会ごとに独自の祭りがあります。杉田劇場では、地域創造の助成金を得て、2018 年度から 3 年間にわたり、さまざまな伝承プロジェクト事業を行なってまいりました。伝承プロジェクトの調査・研究事業として、磯子のお祭り文化、お囃子文化に焦点を当てながら、昨年度は「磯子の祭景」を発行し、今回は集大成として、地域の祭りはどこから生まれたのか、そのルーツも含めて、地域の文化継承の糸口となる冊子、「壱十五（いそご）の神社と祭り」を発行いたします。昨年からはコロナ禍ということで、祭りの中止が相次ぎ、取材等が難しく、祭りの状況などはコロナ前に取材をした内容である点、などは、何卒、ご容赦いただきたく存じます。また、コロナ禍でありながら、ご尽力いただきました関係各所の方々には、この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

本編は伝承プロジェクトの調査員として、地元でご活躍の 2 人の専門家に 3 年間にわたり調査を依頼し、それぞれの観点で、〈神社と祭り〉をまとめてもらい、編集をしたものです。体裁も横書きと縦書きの合本形式で、2 倍楽しむことができる冊子に仕上げました。

<横書きの著者>

いそご郷土史研究家 鈴木美奈子氏(伝承プロジェクト調査員)横浜市磯子区在住
地域の文化を知るために、郷土を愛し、地域づくりに精を出し、パイプ役を買って出てくれる人材が不可欠。そこで、当館の区民企画委員を務め、イマージュ ISOGO や古文書一九会(いっくかい)など区民の文化活動に力を注いでいる鈴木氏に伝承プロジェクトの調査員として参画してもらいました。

目 次

広大な社叢林に囲まれた	<small>ねぎしはちまんじんじゃ</small> 根岸八幡神社	6
住民有志により守られる	<small>かみちよう</small> (上町) <small>はくさんじんじゃ</small> 白山神社	10
川のほとりに佇む	<small>やわたぼしはちまんじんじゃ</small> 八幡橋八幡神社	14
ゆずの聖地の天神さま	<small>おかむらてんまんぐう</small> 岡村天満宮	19
「山王台」の由来	<small>ひ え おおかみ</small> 日枝大神	24
無形民俗文化財のお囃子が聞こえる	<small>もりせんげんじんじゃ</small> 森浅間神社	28
境内に珍しい廃寺の痕跡	<small>くまのじんじゃ</small> 熊野神社	33
ユニークな狛犬がある	<small>すぎたはちまんぐう</small> 杉田八幡宮	38
古くて新しい神社	<small>わかみやごりようじんじゃ</small> 若宮御霊神社	43
矢部野の雰囲気が残る	<small>かなやまじんじゃ</small> 金山神社	47
街道沿いの鎮守さま	<small>たなかじんじゃ</small> 田中神社	51
茅葺屋根が珍しい	<small>くりきじんじゃ</small> 栗木神社	55
境内からの眺望がすばらしい	<small>みねはくさんじんじゃ</small> 峰白山神社	59
不動明王を祀る	<small>かみなかざとじんじゃ</small> 上中里神社	63
境内の真ん中を川が流れる	<small>ひ とりざわじんじゃ</small> 水取沢神社	68

イラスト：百瀬誠一

ちょっと寄り道の筆者：M.S＝鈴木美奈子（伝承プロジェクト調査員）

Y.T＝多根雄一（杉田劇場職員）

広大な社叢林に囲まれた

根岸八幡神社

磯子区西町一の一



JR 根岸駅から少し磯子方面に向かった所にある根岸小学校を過ぎると、「根岸八幡神社」と大きく書かれた案内板がある。その道に入り、小学校の裏手にあし手にあたる所に、大きな社

叢林^{そうりん}①（神奈川県指定天然記念物）に囲まれた根岸八幡神社がある。社叢林は、「かながわの美林五十選」にも入っている見事な自然林だ。入口の大きなイチヨウは御神木で、樹齢 600 年と言われている。大鳥居と並ぶ姿は素晴らしく、見応えがある。境内の樹齢 30 年の枝垂桜^{しだれざくら}も、春には美しい姿で咲き誇る。

この神社の氏子地域（その神社が守っている範囲）は広く、磯子区・中区に合わせ合わせて 24 か町ある。中区 6 磯子区 4 くらいの割合だ。江戸時代には根岸村という一つの村だったため、今でも区の境を越えて一つの地域として存在している。

この辺りは、昔はもっと海が近く漁師町だった。今では、ほとんど漁業従事者はいないが、その気質は残っていて、お祭りなどには熱心だということだ。御神体^{ごしんたい}は海から流れ着いたもので、神社と海との関係も深い。

① 神社を囲うように密生している林

根岸八幡神社の縁起によると、欽明天皇の 12 (551) 年というから、今から 1400 年以上前の大昔、根岸湾上に現れた八幡神の像が河口に流れ着いたので、現在八幡橋八幡神社がある場所へ祀ったという。その後は地元住民によって大切に守られてきたことだろう。

しかし、時は流れて江戸時代初期、徳川幕府の検地（土地の調査）により、神社のある場所が隣の滝頭村へ編入されてしまった。つまり、根岸村の鎮守である神社の社地が、隣村の土地になってしまったのだ。それからおよそ 100 年以上も経った明和 3 (1766) 年。元々の氏子である根岸村の人たちからは忘れられ、滝頭村の人たちにとっては自分たちが建てたわけではないので荒れるに任せてしまった社をどうするのか、

両村で相談をした。結果、社は根岸村へ遷座すること、滝頭村でも社跡に別の社を建立することが決まり、元々の八幡社を現在根岸八幡神社がある場所へ移動し、八幡橋八幡神社は新たに建立されたのだ。その時、根岸八幡神社の現在地には稲荷社が



明治 39 年 正式二万分一地形図

あり、今でも境内社の「地主稲荷」として祀られている。

階段を上った所にある狛犬は、向って左が吽形で、大正 12 (1923) 年 1 月 18 日に伊勢同行者が奉獻したもの。そして右は阿形で、大正 15 年 1 月 18 日と刻まれている。大正 10 年に社殿をはじめ石段、玉垣などを大改築し、美しくなった矢先の同 12

年に関東大震災が起り、鳥居が倒れるなどの被害があったということなので、もしかすると右側の狛犬もその時に作り直したものかもしれない。

境内社は、赤い鳥居の地主稲荷のほか、右に金刀比羅宮、左に巖島神社が祀られている。金刀比羅宮の横には可愛らしく寄り添う狛犬と、元禄 3 (1690) 年の



こうしんとう
庚申塔^②がある。今から 330 年も前のものだ。

境内は根岸幼稚園の園庭も兼ねているので、毎日賑やかだ。滑り台やベンチなども置かれている。七五三参りには園児とその家族も集まり、中には親子三代でこの幼稚園と神社にお世話になっている人もいほど地域に密着している。

境内社と社務所の間を通り、階段を降りると神輿庫があり、その先には広大な社叢林を通して山の上の中区へ抜けられる山道もある。急な高さがあるので、木々の間からは昔は海だった埋め立て工場地帯がよく見える。

神社の年間行事としては、1 月歳旦祭^{さいたんさい}、2 月初午祭^{はつうまさい}、8 月第二土曜日の例大祭^{れいたさい}、大晦日^{おおみそか}の大祓式^{おおはらえしき}がある。そのほか、七五三参り、厄除開運などの祈願や、地鎮祭、竣工祭などは予約申し込み制で行っている。



昭和 30 年代の榊神輿 『浜・海・道』(磯子区発行)



令和元年の榊神輿

8 月の例大祭では、幼稚園の園児たちが手づくりの縁日も開催している。各町では、山車^{だし}や神輿が町内を練り歩く。とくに根岸町では榊神輿が三年に一度、渡御^{さかみこし}^{とぎよ}^③する。珍しいので、平成 24 年に横浜市指定無形民俗文化財に指定された。海が近かった昭和 30 年代までは、町を巡行し終わった榊神輿が海へ入り、穢れを流していたそうだ。江戸時代、白滝不動尊^{けが}を根岸村^{ちんじゆ}の鎮守としていた頃からの伝統があるので、お囃子^{はやし}の会もずばり「根岸不動囃子」という。宮司の宮崎氏の話によると、10 年ほど前までは、お祭りの時に神社でも専門家を頼み神楽^{かぐら}を行っていたそうだ。宮御輿も二台、神社で保管しているが、担ぐためには修理が必要な状態なので、費用を積み立て中。ゆくゆくは神輿保存会を作り、神輿渡御やお囃子なども復活させたいと考えているそうだ。

②中国より伝来した道教に由来する庚申信仰に基づいて建てられた石塔

③神輿などが町内を巡行すること

ちょっと寄り道

根岸小学校 校庭の真ん中のクスノキ

根岸八幡神社のすぐ隣の根岸小学校にあるクスノキの大木は圧倒的な存在感だ。4階建ての校舎より高いうえ、なにしろ、普通だったら活動の支障になりそうな校庭の真ん中に立っているのだ。校舎のすぐ側にもう1本あり、「くす太郎」、「くす次郎」という愛称がついているという。

と言っても、初めから校庭中央に植えられたわけではなさそうだ。昔の様子を知る人の話によると、校舎の建て替えにより校庭として使う場所が変わったことで、端に位置していたもの



根岸小学校の校庭 磯子区西町2-4

が真ん中になってしまったという。その頃には根がしっかりと張って、移植できなかったそうだ。

樹齢は100年を超えるといい、昔も今も子どもたちに愛されている。

もう一つ、寄り道したいところは、神社のすぐ近くにある「根岸なつかし公園」。ここは明治から大正にかけて横浜で活躍した銅鉄取引商の柳下氏の邸宅を保存活用した公園である。建物は、大正時代中頃に建てられているが、震災・戦災にも耐えてきた。柳下邸では五右衛門風呂体験や三味線コンサートなどもやっているのだから、ちょっと寄り道をしてみてはいかがか。(コロナ禍の現在は中止) (M.S/Y.T)



根岸なつかし公園の柳下邸 磯子区下町10

住民有志により守られる

(上町)白山神社

磯子区上町一二



そかいどうろ
根岸疎開道路④を堀割

川に向かって進み、根岸橋に出る前の通りを北上すると、テラノホールという素敵な名前ほうしゃくじのホールを持つ宝積寺がある。江戸時代には、こ

べっとう ゆかり
れから向かう白山神社の別当⑤だったという所縁のある寺だ。

その前を通り過ぎるとかみちよう
磯子上町公園に出る。こちらから見るとブロック塀の裏側にある「白山神社」と左矢印の案内板を見過ごさないよう気を付けて右側の細い路地に入る。そのまま左手に進み、手前の資源回収所になっているブロック塀の案内板が見つけられれば安心だ。あとは道なりに進むと、石垣と住宅の間に奥まった鳥居が見えてくる。

鳥居をくぐると、梅、桜、山茶花や水仙などの花の咲く植物が植えられていて、それぞれの季節で楽しめる。鳥居の横の掲示板には、「白山



神社への案内板

④空襲による延焼防止を目的に建物を撤去し拡張した道路

⑤江戸時代以前に、神社を管理するために置かれた寺

今でも宗教法人化
しないまま 昔から村民
の子孫がお祀りしている
区内で唯一の神社
です



素朴な手水舎
すごくいい

白山神社

さまの会」による「白山神社の歴史」が貼られていて、明治 23（1890）年に祭礼が行われた古い記録、鳥居・石段などの整備の様子、管理・運営などの^{へんせん}変遷が書かれている。

階段を上った高台に手水舎、^{ちょうづしゃ}庚申塔、社殿がある。大正 5（1916）年に大改修された二代目の社殿は今より山の上にあっ

たが、古くなったため、平成 5（1993）年、付近の急傾斜地工事のおりに山の下に建て替えられた。^{ぶんせい}庚申塔は文政13（1830）年 3 月に建造されたものだ。

江戸時代に書かれた『^{しん べん む さ し ふ ど き こ う}新編武蔵風土記稿』の根岸村の項を見ると白山社が二つあり、一つが「村の北にあり、宝積寺持」と書かれているので、こちらが現在の白山神社のことだろう。昔は「^{い わ}歯の神様」として拝まれ、御神体は石で、白蛇だとの謂れがある。明治初年の神仏分離^⑥により宝積寺から別れて、村民有志の共有地に白山社として建立さ

れたという。いちばんの特色は、今でも宗教法人化しないまま、昔から守ってきた村民の子孫がお祀りしている磯子区内で唯一の神社だということだ。

その訳はこうだ。江戸時代に^{いりあいち}入会地^⑦だった境内地は、明治には村民 19 名の共有名義だった。戦後、代替わりした地権者が約 100 人にもなってしまったため、苦勞の末に元の一軒につき一人に集約し、昭和 51（1976）年に「氏子の会」が設立され、祭礼も復活した。

しかし、個人名義ではまた相続の問題が起



⑥ 神仏習合の慣習を禁止し、神社と寺院とをはっきり区別させること

⑦ 村や部落などの村落共同体で所有した土地

きるため、平成 16（2004）年、隣接する宝積寺に境内地の所有権を移した。但し、日常のことは有志で行くと取り決め、「白山さまの会」が結成された。当番制で、毎月 1 日と 15 日に神前の^{さかき}榊や米・酒などを取り替えているそうだ。

ここまで努力した前会長には、「戦争中に白山神社から出征し、ご加護のおかげで生還できた」とのひとしおの思い入れがあったそうだ。根岸八幡神社に^{ごうし}合祀や移転がなされなかったのは、氏子のこういう強い思いからだろう。

毎年 11 月 17 日が祭礼日。明治 23 年に行われた祭礼日以来、同日だそうだ。元の共有者の子孫を中心に、祭礼に来てくれる人に案内を出し、40 人ほどでお参りしている。社殿建て替えの^{せんざさい}遷座祭のときなどには神職に来てもらっているということだ。上町は根岸八幡神社の氏子区域でもあるので、毎年の初詣はまず白山神社にお参りして、その後根岸八幡に行くそうだ。

江戸時代のこのあたりは農村で、田より畑が多かったようだ。16～17 軒の本百姓がいた。明治以降、横浜市に入り、^{あざしぼう}字芝生とか^{かみちよう}西根岸上町と呼ばれた時期もあった。山の上（現在の米軍住宅地区）にも畑があったが、戦後接収された。昔は、どんと焼きなども行われていたという。

堀割川の上町側の町並みは変化が少なく、大きなマンションが建つこともなく小規模な戸建て分譲があったくらいなので、昔ながらの景観を町歩きで楽しめる。路地を入ると古くからの家もまだ残っている。



庚申塔。裏には「願主 上村中」とある

白山神社へ向かう時に目印にした上町公園は、地主の寄付により戦後に整備されたもの。それ以前は白山神社が子どもたちの遊び場で、裏山にはクヌギの木があり、カブトムシを採って遊んだそうだ。

明治 23 年に「^{かみこうじゅう}上講中[®]」により始まった祭礼から 120 年を記念し、平成 22（2010）年に『続・上町白山さまの歴史』という小冊子を発行していて、希望する人は住所・氏名を^{さいせんぼこ}賽銭箱に入れると送ってもらえるとのことである。

⑧ 神仏にもうでたり、祭りに参加したりする信仰者の集まり

ちょっと寄り道

神社の裏に広がる米軍住宅地

白山神社の裏手を左に入る細い道は、一見個人のお宅への入り口のように見えるが、向こう側へ抜けられる。さらに住宅を右折し、山へと向かう階段を上ると、道はだんだん細くなり（ほとんど藪やぶの中。夏はお勧めできない）、やがてフェンスに突き当たる。その向こうは根岸米軍住宅地だ。目の前に今は無人となった瀟洒なハウスがある。振り返ると磯子の町が眼下に広がっている。(M.S)



- 左上：神社裏から米軍住宅地区へ
- 右上：最後はフェンスに突き当たる
- 左下：フェンスの向こうのハウス
- 右下：上からの眺め





磯子区原町一〇の九

八幡橋八幡神社

川のほとりに佇む
たす

磯子と根岸の間を流れる

堀割川。その河口近くに
やわたばしほちまんじんじゃ
八幡橋八幡神社がある。

本来の名称は八幡神社。

社名からつけられた橋の名前が、神社を特定するための通称となっている珍しい例である。地名をとって滝頭八幡神社と呼ばれることもある。

堀割川は、明治 7（1874）年に完成した人工の運河で、川幅が広いうえに交通量の多い道路に挟まれているため、両側が分断された印象を受ける。実際、八幡橋八幡神社がある原町は根岸地区連合町内会に所属している。しかし、神社が守っている地域は、原町はもちろんだが、川の反対側も含まれている。元は八幡川だった細い川を、吉田新田^{よしだしんでん}開発用の土砂の確保と横浜方面から根岸湾への物流のために掘削して川幅も広くしたのが堀割川だ。工事までは、それほど川の両岸が離れていなかったため、村としての一体感は今よりはあったのだろう。

八幡橋八幡神社と根岸八幡神社の間には深い関係がある。詳細は根岸八幡神社

◎江戸時代に現在の中区および南区に跨る地域で開墾された新田

のページに譲るが、江戸時代の明和 3（1766）年に滝頭村のものとして現在地にも八幡社が建立された。『新編武蔵風土記稿』には、三島八幡氷川合社という名で載っていて、別々にあった三社が合祀されたようだ。管理は川向こうの密蔵院だった。安永5（1776）年には滝頭村を支配していた旗本の小浜氏が東照宮（徳川家康を祀る神社）を勧請し、祭神の一柱となっていて磯子区内では唯一である。

鳥居をくぐると境内には巨木が多く、ちょっとした林の様相だ。しめ縄が張られた御神木



名木古木の多い境内

の二股のケヤキをはじめ、エノキ、タブノキ、ムクノキ、カヤなどの名木古木が天高くそびえている。昭和 55 年の神奈川新聞の記事によると、境内にあるプラタナスが当時の推定樹齢 150 年で、横浜開港の頃に植えられたものではないかということだったが、今は残念ながら姿を見ることができない。かつては、ほかにも大木があったそ

うだが、台風でかなり被害を受けて、これでも減ってしまったという。

堀割川工事の時に社殿を移動させなければならず、明治 5（1872）年に新築したものが、その後の幾多の苦難を越え現在にまで至っている社殿。平成 30（2018）年に改修されたばかりだ。彫刻も見事で、三方の軒下をぐるりと十二支の彫り物が囲んでいる。社殿の裏側には入れないので、残念なことに全部を見ることはできないが、探してみるのも楽しい。大正 8（1919）年には、社殿の修復や境内の大掛かりな再整備が完成した。境内にある手水鉢、立派な石灯笼 2 対、社殿前にあるこれも 2 対の狛犬などは、その時に寄進されたものである。手前にある狛犬は岩に乗り、躍動的な珍しい姿だ。

ところが、大正 12（1923）年の関東大震災で社殿や玉垣が倒壊、鳥居も折れるという大被害を受けてしまった。社殿は組み直し、鳥居そのほかもすべて新設する大工事が終わったのが大正 15（1926）年。



神社の入り口で目につく大きな碑は、その時に建てられた「営繕工事竣成記念碑」だ。「敬神^{けいしん}」という文字は、日露戦争で有名な東郷平八郎の書。折れてしまった鳥居は現在も門柱として再利用している。時代は下って平成 23（2011）年、東日本大震災のために再び玉垣が倒れる被害にあってしまい、現在の玉垣はその後に修復したものだ。

社務所の奥、堀割川沿いの道路からよく見える位置に、昭和 5（1930）年の天皇^{ごたいてん}御大典^{ごたいてん}⑩記念碑があり、頂きには球体がある。かつては、その

の上に金属製の鳥があったというが、戦後のどさくさで何者かに持ち去られてしまった。この球体が何を表しているのかは、記録がなく、よく分からないようだ。記念碑の築山には、ほかにも石がたくさん埋め込まれており、「八幡橋料理店 深川」、「翁園」、「磯子二業組合 芸妓組合」と彫り込まれたものもある。

社殿に向って右側には、稲荷大神と天照大神を祀る境内社もある。そのさらに後ろには古そうな「氏子中」と刻まれた祠^{ほこら}が二つある。

この神社の運営には、町の人たちが大きく関わっていて、とくに、神社がある原町の人々が中心的な役割を担っているようだ。訪れる人は多く、近所の人々が待ち合わせの場所にすることもあり、御朱印帳を持った人も時折来る。横浜市電保存館の道すがら立ち寄る人もいるということだ。

⑩天皇即位の礼

例大祭は毎年 8 月第 1 土・日曜日に行われている。本来の祭礼日は 9 月 12・13 日だが、9 月は台風が多いことや、お祭りに地元の人、とくに子どもたちが参加しやすくするために変更したようだ。お祭りの時には、神輿が^{みこし}氏子区域を巡行する。この大きな神輿は宮神輿で、普段は保管庫に収蔵されているため、お祭りの日にしか見ることができないものだ。行列はお囃子を鳴らしながら車が先導、次に宮司、神社の総代が揃いの浴衣で続き、大人たちが見守る中で子どもたちが引く台車に乗せた神輿の順だ。10 年以上前までは、大人が神輿を担いでいたが、今は子どもたちが引く形になったということだ。



大正 8 年に造られた動きのある狛犬



令和元年に行われた祭礼の様子

ちょっと寄り道

かがい 磯子に花街があった



境内にある謎の鉄球。これはブイともきらい機雷^⑪ともいわれているが、その正体は不明だ。興味深いのは岩のような台座に彫られている文字。「磯子二業^⑫組合」、「磯子芸妓屋組合」、「磯子見番^⑬」などの文字から、磯子に花街があったことが分かる。



二業組合 芸妓組合



八幡橋 料理店 深川

もともと花街というのは社寺の門前、芝居小屋・劇場のある町、海沿いの行楽地などにつくられる傾向があった。磯子では、海もありアテネ劇場もあった磯子 2 丁目花街と



磯子 2 丁目に残る昔の街灯

して形成されてきたと思われる。

その痕跡が今でもエリア内で見ることができる。左の街灯がそれだ。近くの老舗「やなどり茶舗」のご主人のお話では、町内にはこのレトロな街灯が何本も並んでいたという。磯子区役所発行の『浜・海・道』によると、この花街には四代目・古今亭志ん馬が住んでいたそう。落語家もいる粋な町だったのだろう。

そんな過去の雰囲気やわづかではある感じられる路地裏を散策するのもおすすめだ。(Y.T)

⑪水中に設置され、艦船が触れると爆発する兵器

⑫花街を構成する料理屋と芸者置屋

⑬客席に出る芸者の取り次ぎや料金の計算などの事務を扱った所

ゆずの聖地の天神さま

岡村天満宮

磯子区岡村二の二三の一



岡村地区のちょうど中心に位置する岡村天満宮。磯子方面からは、汐見台から岡村へ通じる道の「岡村天満宮前」交差点を右折、大鳥居のあるその名も天神道路を上り、左を見れば岡

村天満宮の入り口。天満宮のすぐ隣は、テニスコートや野球場、梅林などがある岡村公園だ。この辺りは、富士山絶景のロケーションとしても知られる。岡村天満宮のウェブサイトの「幻の神殿」ページによると、社殿が老朽化したため、昭和 12（1937）年にこの岡村公園の野球場あたりに遷座計画があったという。一帯が、岡村天満宮の境内地だったのだ。地鎮祭や稚児行列、地固め神事としての奉納相撲大会などが賑やかに行われたが、同年に始まった戦争の影響で、社殿のための資材は軍用に、用地は高射砲部隊に占領され、戦後は接収の憂き目にあい、結局遷座はかなわなかったという。



天神道路を左に入ると、また鳥居がある。赤く塗られた手すり美しい階段を上ると、同じく赤い灯籠とうろうと緑濃い木々との対比で、まるで別世界に来たようだ。二つ目の階段の上り口には、大正時代に横浜で人気のあった大阪歌舞伎いちかわあらじろうの「市川荒二郎」が寄進した石灯籠が左右にある。その先の狛犬には「磯子区氷取沢町 金子忠三郎」と彫られている。宮司の杉原氏が、氷取沢神社を兼務しているご縁からとのことだ。そのほかにも、茂みの中には所々に、横浜市教育委員会による岡村天満宮の説明表示板や躍動的な狛犬、古そうな手水鉢、お百度石などが置かれているので、探してみよう。



岡村天満宮



学問の神様
菅原道真公が
祀られる神社
赤い柱が印象的
です



階段を上った右手には大きな「ゆずの壁画」もある。地元出身のミュージシャン「ゆず」が伊勢佐木町でストリートライブをしていた頃を記念して、横浜松坂屋の屋上に作られたが、松坂屋の閉店が決まったため、ここに移されたものだ。壁画手前の敷地は花壇になり、訪れた時にはパンジーで「ゆず」の文字がかたどられていた。

階段を上りきると、正面に社殿が見える。梅、桜やイチヨウなどのほか、季節ごとの花に彩られる赤が鮮やかな社殿だ。手前には境内社の白笹稻荷しらささいなりが祀られ、傍らにはなでると患部に効果があるといわれる石の牛がある。多くの人になでられたとみえ、つやつやと光

っている。天神様と牛の関係についての説明板があり、読むと天満宮に牛がある理由がよくわかる。社殿の左側の並びにも、もう一つ石牛がある。ほかにも、境内には針塚や筆塚がある。



悪い部分をなでると治癒する



子どもの頃の美空ひばりが歌った旧神楽殿

岡村幼稚園の園庭でもある境内には遊具も置かれ、楽しいな雰囲気と荘厳さが混ざり合った不思議なスペースだ。ピカチュウの遊具には、主人公の声を務める松本梨香さんのサインが入っている。隣に位置していた神楽殿では滝頭生まれの加藤和江ちゃん（のちの美空ひばり）が歌を披露したことがあったそうだが、現在改築工事中で、ヒノキ造りの新



だいじんぐう

杉山明神社、太神宮、天満宮。社伝によると、天満宮は、鎌倉時代の建久年間（1190～1199年）、鎌倉から移住してきた源頼朝公の家臣が、京の北野天満宮を勧請して祀ったということだ。杉山神社は、源頼朝公が鎌倉幕府安泰を願う鬼門除けとして祀った「七杉山神社」の一つだそうだ。明治43（1910）年に三社は杉山天満宮として合祀され、昭和5（1930）年には地名をとって岡村天満宮に改称し、現在に至っている。

神楽殿の完成は令和3（2021）年8月予定ということだ。社殿の右には絵馬掛け所がある。1枚目は願い事をする赤いもの。願いがかなったら、2枚目に願ほどの緑のものを奉納するので、2枚で1セットだ。

『新編武蔵風土記稿』の岡村の項に記載されている三社は、

けんきゅう

年間行事には、1月1日の元旦祭、25日の初天神祭、2月8日の針供養、5月25日の春祭、8月24、25日の例大祭、9月25日の秋祭、11月の七五三、11月下旬～12月初旬の日曜日の筆祭などがある。初天神で授与される^{すいかてんじん}西瓜天神は、神奈川県郷土人形に指定されている。

例大祭で巡行するのは、山車1台、神輿10基と大掛かりだ。そのうち2基が宮御輿（宮元）。昭和10（1935）年前後に作られたが、戦時中に^{ほうおう}鳳凰などの飾りすべてを金属供出して、戦後は神社に保管されたまま古くなってしまっていた。それを見かねて復元しようとしたのが「岡村神輿保存会」の始まりだ。平成30（2018）年には40周年を迎え、盛大な式典を開催したそうだ。



筆塚



市川荒二郎氏寄進の石灯籠

神輿の巡行や神楽殿で^{はやし}お囃子を演奏するのは「一友會」^{いちゆうかい}だ。一時期、お囃子^{すた}は廃れてしまっていたが、お祭り^{まつり}と神輿の復活を見て、滝頭囃子のメンバーに演奏を習って結成したそうだ。

演奏は、例大祭、元旦祭などの神社の行事以外に、賀詞交歓会やケアプラザ、学校のイベントなどへも出張している。毎週水曜日の夜に滝頭地域ケアプラザで練習している。町内の回覧板で会員募集をしているそうだ。

例大祭の時、社殿の中では神事として雅楽を演奏する。神楽殿では、一友會のお囃子演奏のほか、岡村中学校の吹奏楽演奏、タレントのコンサート、大学の和太鼓研究会の演奏や町内有志や幼児園児の踊りなどもある。

岡村天満宮を守るのは、自治会とは別組織の^{ほうさんかい}奉賛会。中心となるのは、やはり古くからこの地域に住んでいる人たちだ。例祭前の土・日曜日には町内のお祭りも開催され、大いに盛り上がっている。

ちょっと寄り道

岡村公園レストハウス

岡村天満宮の神楽殿の横に細い通路があり、その先の階段が岡村公園につながっている。テニスコートでプレーする人たちを横目にして回り込むと、一段高いところにレストハウスがある。ここからは、戦時中に高射砲の陣地がつくられたのも頷ける眺望を楽しむことができる。本文にも書いてあるように、西側を眺めると富士山がよく見える。北側方面には「みなとみらい」の摩天楼だ。

ホール内部には漫画家・イラストレーターの平野いづみさんがゆずを描いた作品があちこちに置いてある。壁にも額入りのイラストがたくさん♪ まさに「ゆずワールド」である。ここは、ゆずファンでなくとも何時間でも過ごせる。彼女が描いた「ゆずマップ」も付近のおすすめスポット満載で楽しい。(Y.T)



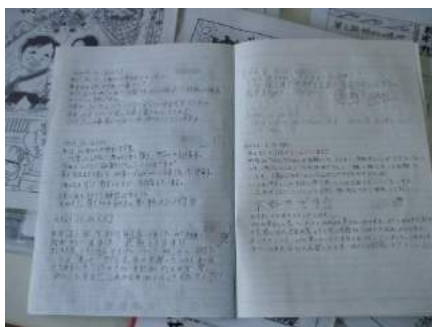
絵葉書・しおり・缶バッジのセット



ゆずの写真やイラスト



ゆずや岡村を紹介する平野さんの漫画



訪問者がそれぞれの思いを綴っている

「山王台」の由来

日枝大神

磯子区磯子四の三の一



国道 16 号バス停「浜」そばの磯子旧道を入ると、喧騒けんそうから離れ一気に静かなたたずまいとなる。この道は古く、江戸時代にも海辺の道として利用され、東へは滝頭、西へは岡村や上大岡へ向かう道に通じる主要道路だった。やがて現れるのは

「磯子観音」という大きな看板のあるこんぞういん金蔵院だ。ここは、江戸時代に磯子村の鎮守でさんのうごんげんさんひ え おおかみのうごんげん^⑩と呼ばれていた日枝大神（日枝神社）の別当を務めていた寺だ。敷地に入ると大きな「鮭塚」が目に入る。道の反対側の小高い丘には墓地がある。江戸時代には向堂があった場所で、その向こうはすぐに海だったそうだ。墓地は今でもかなりの高さがあり、海からは間坂の丘から夕見台まで一続きにびょうぶ屏風を立てたように見えたことだろう。



「日枝大神」の看板の隣にはみみずくの石像、ご祭神と来歴が刻まれた石碑、村社日枝大神の「村社」部分が埋められた社号標がある

⑩権現：仏や菩薩が人々を救うために仮の姿（神様）になって現れること

旧道に戻りさらに進むと、玉垣に囲まれた「日枝幼稚園・大神」の看板が見えてくる。日枝大神の入り口だ。入ると遠くに鳥居があり、長い階段が続く小高い丘の中腹あたりに社殿が木々の間からのぞいている。鳥居までの間は石畳が敷かれ、脇にはさいじん祭神三柱と明治6年12月村社に列し、大正11年11月しんせんへいはりきょうきょうしんじんじゃ神饌幣帛料供進神社に指定された来歴が刻まれたものなどの様々な石碑や、七つのおほのぼり献灯などがある。昭和48年の大磯新調寄附芳名碑には、山手、浜東・西、室ノ木、広地、禪馬といった町内会・自治会名がある。

鳥居の手前まで来ると、細い横道がある。旧道を通ると、金蔵院と日枝神社の間には住宅があるので距離があるように感じるが、一本中に入ったこの道では、山続きで隣り合っ

ているのがよくわかる。

ちようずしや手水舎は、令和元年の台風で被害を受けたため、令和2年8月に修復されたばかり。柱や屋根などは真新しい木材だが、よく見ると飾りの彫り物や所々の組み木は変色している。恐らく、古い手水舎を大切に再利用したものだろう。

長い石段は大正12年8月7

日竣工。その1ヶ月後の関東大震災で、社殿は大きく損壊したが、この階段は無事だったようである。左右の堂々とした狛犬は昭和41年のもの。後ろには「石段改築」や「社殿修理・社務所改築」などの記念碑が並ぶ。

ちゆうこんひ忠魂碑や巨大な石灯籠など、ここの神社には立派な石の建造物が多い。右の狛犬の後ろにある山のような形の石碑は、句を碑に刻み神社に建造しようとした父の遺志をついで、堤磯右衛門こんりゆうが建立したものだ。磯右衛門は磯子の出身で、日本で初めてせっけん石鱒を作った人物として知られている。石段を登ると、左右の茂みの中にも長い年月の間に埋もれた石碑があるので探してみよう。



表には磯右衛門の父の「明残る月よりしろし露の玉」、裏には磯右衛門の「名月や水に影おく峰の松」句が刻んである



園児の食事を運ぶリフト



祭礼の日、神大神楽を奉納する神楽殿
(平成 31 年)

階段を登りきると門がある。門の手前にも、大正 9 年に作られた、どことなくユーモラスな狛犬がある。

社殿は平成 6 年に建て替えられた。左右には日枝幼稚園の園舎があり、境内は園庭を兼ねている。社殿のすぐ隣の建物も普段は園舎として使われているが、お祭りの時には^{かくらでん}神楽殿へと姿を変える。右側の園舎の奥にはリフトがあり、園児の食事を運ぶのに利用されている。社殿に向かって左を振り返ると、女坂と思われる細い曲がりくねった階段があり、下の手水舎へとつながっている。

本来の例祭日は 8 月 7 日だが、平日では勤めに出ている人がお祭りに参加できないので、8 月の第一土日で固定して行っている。夜店も出て賑やかに開催されるが、最近では猛暑のため規模を縮小するようになったそうだ。見どころは、夜間に行われる^{じんだいかぐら}神代神楽の奉納で、横浜市指定無形民俗文化財港北神代神楽の佐相家元が解説付きで演じるという、磯子区内では珍しいものなので一見の価値あり。

地元のお囃子は、残念ながら伝承が途絶えてしまったそうだ。各町には^{みこし}神輿があり、^{たいこ}太鼓^{だし}山車を持っている所もある。神輿は、担ぎ手の不足で、飾りだけの所が多くなってしまったが、お祭りをどのように盛り上げていけばよいか、無理のない程度で神社からもいろいろ発信していきたいと考えているそうだ。

ちょっと寄り道

金蔵院の鮭塚

日枝大神のお隣、金蔵院の敷地に入るとすぐに、ひと際目をひく巨大な石造物がある。鮭塚だ。なぜここに鮭を供養する碑があるのだろうか。鮭塚の上を見上げると、玉垣に魚類を扱う会社の名前がたくさん彫られている。



日枝大神の隣にある金蔵院



玉垣に彫られた魚類の会社名

手前の小さな碑に由来が説明されている。昭和3年に塩干同業組合が杉田の妙法寺に建立し、業界発展の願いを込めて毎年十一月十一日に供養を続けて来た。戦後は中央市場水産部自治会が碑の維持管理をしてきたが、昭和53年に建立五十周年を記念して金蔵院の境内に移転することになったそうである。「魚類全般の象徴として子々孫々魚介類の供養を行い水産関係者の繁栄を祈願する」ということだ。

鮭という字は「魚へん」に「土」「土」と書く。土が二つで十一月十一日を記念日としている。妙法寺には、樹齢600年と言われるビャクシンがある辺りにかつては池があり、その中の小島に碑を建てたらしい。その名残は、「横濱鹽魚商組合」と刻まれた、ビャクシンを囲む玉垣の石に見ることができる。



鮭塚

今では遠くなってしまった海だが、昔は海沿いの地域で漁業が盛んに行われていた痕跡が鮭塚にも残っている。(M.S)

無形民俗文化財のお囃子が聞こえる

森浅間神社

磯子区森二の一六の七



もりせんげん
森浅間神社へのアプローチは複数ある。それは、森浅間神社が山の上であり、どちらの方面にも道がつながっているからだ。この山は、

古くは「がさら我沙羅山」、「がら我羅山」と呼ばれていたそうだ。神社とその周辺の樹叢はじゅうそう神奈川
県指定の天然記念物になっていて、自然豊かだ（説明板が神社の境内にある）。周辺の地域には「森浅間神社参道」と書かれた案内板が 3 か所ある。それぞれの道をたどって小さな発見をするのも楽しい。



案内板の一つは、びょうぶがうら京急屏風浦から環状 2 号線に出て坂を少し下った反対側の細い道に入る所にある。矢印付きの案内がある通りから住宅の間の坂道を上ると、途中、赤い鳥居がある。邸内社と思われるお稲荷さんだ。環状 2 号線の屏風ヶ浦バイパス近くまで行くと、森幼稚園がある。その先の山の中腹にあるのが森浅間神社下宮だ。由来説明板によ

ると、江戸時代に森村のあちこちにあった十二社がこちらに合祀されている。社は、現在神輿・花山車蔵になっている敷地にあった神明大神宮を移築したもので、江戸時代の作と言われているそうだ。神輿・花山車蔵は環状 2 号線沿いにあり、花山車 2 基と町の神輿合わせて 7~8 基を収納している。



下宮に掲げられている「伽沙羅山」の文字

上の社殿へ行くには、下宮を右に曲がり、真っすぐ天に続くかのような石段をさらに上る。この石段は、奥行が狭く高さがある珍しいものだ。途中の大鳥居は、環状 2 号線の「屏風ヶ浦」交差点近辺からもよく見える。階段を上りきり鳥居をくぐると、開けた平地に社殿がある。

国道 16 号線からだ「森 2 丁目」交差点を山側の細い道に入る。分かれ道を左に進むと山へ向かう階段がある。ちょっとしたハイキングコースのように木々の間をうねうねと上ると、森みはらし公園があり、その先には朝日不動滝がある。昔は、富士講の山開きの時に修行者が白装束で滝に打たれ清めたほどの水量があったが、今は崖から染み出す程度にな



朝日不動滝::周辺には古い石碑が並ぶ

ってしまった。祀られている不動明王は、鎌倉時代のものとのこと。横にある制多迦童子せいたかどうじと矜羯羅童子こんがらどうじの石像は、昭和 56 (1981) 年に滝を直した時の新しい物。不動明王と同じ時期に作られた童子 2 体は壊れてしまっていたため、安置所に入られている。南向坂口なんこうの鳥居を過ぎ、さらに進むと森浅間神社だ。

この山には縄文貝塚や横穴古墳があり、古くから人が住んでいたことがわかっている。神社の創建は鎌倉時代の末で、社伝によると、追い詰められた鎌倉幕府最後の将軍



もりくにしんのう
 守邦親王から守り本尊を託された「聖護院未修験亀谷山権現堂福禅寺」6代目がこの地へ逃れ、安置したのが始まりと言われている。また、戦国時代には房総半島から渡ってくる里見氏^⑮に

対する砦として、小田原北条氏の家臣だった間宮氏^⑯の重要拠点だったという歴史もある。江戸時代には、森三か村の鎮守となった。代々この社を守ってきた熊野修験者の子孫 19 代目の時に松本村（現港南区）に権現堂を移したが、その後も社を管理続けた。明治初年の神仏分離により、福禅寺を廃寺、僧侶から神職^{げんぞく}に還俗したあとも守り続け、現在の松本宮司は 36 代目とのことだ。

境内に入ると、朱塗りの社殿、神輿庫^{ちようずしや}、手水舎が美しい。名木古木のスダジイや立派な石灯籠もある。向って左の灯籠は天明 8（1788）年と彫られている古いものだ。



社殿手前の狛犬は、左右とも子連れのもの。社殿に向けて右には神輿庫がある。中には、文化 5 年作と伝わる大きな宮神輿が保管されている。この大神輿は、お祭りの巡行の時でも人が担がず、台車に乗せて引く。ただし、

この神社山頂から下の町までは人力で運ばなければならない。神輿会の森睦のメンバーによる「大神輿の階段おろし」は、夏祭りの見どころの一つだ。

⑮房総にいた戦国大名

⑯39、43、45、46、64、65 ページ参照



社殿左、社務所との間には大きな石造物が並ぶ。昭和 11（1936）年の復興記念碑、漁業組合の記念碑、笛名人として知られ森のお囃子に多大な貢献をした金子菊次郎の報恩碑、鳥居建立建碑、神田囃子森保存会の記念碑などだ。その奥や社殿の横には、古い祠のようなもの、庚申塔、寄進記

念碑、常夜灯の一部に見えるものなどが数多く置かれていて、長い歴史の中での、代々の住民と神社とのつながりを垣間見ることができる。

神社を運営するのは町内会とは別組織だが、両方とも地域に根差した人が中心なのでとても良い協力関係だ。4 月の花まつりでは、みんなで草餅を作り、ゴザを敷いて花見をする。森睦は出店担当だ。社殿に置いてあるカラオケセットはみんなで好きに使っていて、地域に開かれた神社となっている。新しい住民の中にも境内を掃除したり、お祭りに熱心に参加したりと関心のある人もいるので、徐々にお声がけをして運営を手伝ってもらえればと考えているそうだ。

例大祭は元々6 月の行事だったが、戦後に平和を祈る意味で終戦記念日の 8 月 15 日に変更した経緯がある。この夏のお祭りは、地域全体で盛り上がる。二日間、お囃子の演奏、花山車、宮神輿、町の大人神輿、子ども神輿の巡行、出店などがあり、大勢の人たちでとても賑やかだ。広い氏子区域なので、山の上のほうの地域は神輿を車に乗せて渡御するという。お囃子の演奏は、横浜市無形民俗文化財に指定されている神田囃子森保存会。昭和 45 年の保存会設立から、笛・舞などを伝え続けている。神社の行事の時にはもちろん、それ以外にも見事な演奏を聴く機会が多くある。メンバーも随時募集しているそうだ。



ちょっと寄り道

大岡川分水路河畔プロムナード

昭和 30 年代後半、大岡川・日野川の上流域での急激な宅地開発により川の氾濫が起こりやすくなった。そのため、根岸湾への直接放流を計画し、昭和 56 年に完成したのが大岡川分水路だ。

大岡川本流から来た水は国道 16 号線、産業道路、根岸線、首都高速湾岸線をくぐったあと、工場地帯を横切って根岸湾にそそいでいる。埋め立てで海が遠のいたことから、この流れに沿って河畔プロムナードがつくられた。そこには桜が植えられ、春には花見で賑わう。

先端まで行くと、その先に広がる海を間近に見ることができる。振り向くと、高速道路の向う側の我沙羅山（がさらさん）の上に森浅間神社が見える。（M.S）



境内に珍しい廃寺の痕跡

熊野神社

磯子区中原四の二四の一七



京急杉田駅を山側に出て上大岡方面へ少し歩いて、左に曲がる道が熊野神社参道。JR 新杉田駅側からだ、「新杉田駅西側」交差点から杉田小学校の横を通り過ぎ、中原本道に出

ると熊野神社参道碑が建っている。そのまま京急ガード下をくぐり、左へ道なりに進むと京急杉田駅から来る道と同じ道に出るので、こちらからは右折で熊野神社へ向かう。左手の住宅が密集した中には、杉田湯という昔ながらの銭湯があったが、平成 31 年に惜しまれつつ閉業した。道を突き当たりまで行くと、右手が熊野神社の入り口だ。



熊野神社があるのは中原で、江戸時代には森中原村と呼ばれていた。海沿いの立地を活かし、村民は農業のほかもりくでんに漁獵も行っていた。もりぞうしき森公田村、森雑色村と共に森三か村と呼ばれていた。埋め立て前は、漁師町で、国道 16 号線が波打ち際を走っていた。海での安全祈願を目的に、神輿も海に入ったものだという。また、海で作った海苔を杉田小学校の柵の所で干していた様子も見られたそうだ。そういう土地柄なので、神社も海と深いつながりがある。

社伝によると、^{けんきゅう}建久3（1192）年、源頼朝公が征夷大將軍になったあの「いい国作ろう鎌倉幕府」の年。鎌倉山崎にあった泉蔵院の^{せんぞういん}智覚法印が、^{ほういん}頼朝公の命で紀州熊野の三所権現で治国安民の祈願をした。その時に拝受した三所権現像などをクスノキの船に乗せ海に浮かべたところ、ここ中原に流れ着いたというのだ。頼朝公は早速、山上に社殿を造立、山麓^{とうこくじ}に桐谷寺を建て智覚に任せた。のちに桐谷寺は山号を大靈山泉蔵院と改めた。その後も子孫が代々、明治の神仏分離により法印から神職となり神社を守り続け、現在の杉原宮司が36代目ということである。杉原氏は、栗木・田中・金山神社も兼務している。

入り口から鳥居までの間には、昭和17年の大きな熊野神社参道拡張記念碑、芭蕉



左から参道拡張記念碑、芭蕉句碑、華表建設記念碑

の「梅が香に のつと日の出る 山路かな」句碑（設置者不明）、明治36年の^{かひょう}華表建設記念碑が並ぶ。華表とは鳥居のことだ。また、階段の右には、文化10年^{せつちゅうあんりょう た}に観梅に来た際の雪中庵蓼太による「梅が香に 腹ふくるるや 帆かけ船」の句碑もある。江戸時代中後期、杉田の梅が有名になり、江戸近郊の文人たちが訪れ、ここの境内の高台も梅見の場所となったため、句碑が残されているのだろう。



杉田十境眺望図（一恵斎芳幾 作）

鳥居の左後ろには、中原神輿睦神輿舎があり宮神輿が保管されている。右手の社務所の授与所の壁には「杉田十境眺望図」が飾られている。神社に古い版木があったので、社殿の建て替え（昭和63年）を



雪中庵蓼太句碑

記念して刷られたものだという。

社務所を過ぎると全部で 90 段近くある長い階段だ。右にはなだらかな女坂の階段もある。階段下の右手には貞享^{じょうきやう}9（元禄 5、1692）年の常夜灯がある。明治 41 年に国の政策で一村一社統合が行われた時に、中原北にあった中原明神から移築したものだそう。左手には、海苔の生産や埋め立て反対運動で功績があった河原長治郎翁之碑（屏風浦漁業会、昭和 22 年）がある。



泉蔵社

山の中腹、階段の左手には名木古木の^{せんぞうしゃ}カヤの後ろに泉蔵社がある。江戸時代、大霊山泉蔵院が熊野三所権現の別当を務めてきたが、明治初年の神仏分離によって、熊野三所権現は熊野神社へ、泉蔵院は廃寺となった。昭和 63 年に、かつて熊野三所権現社と泉蔵院に祀られていた諸神をお祀りする泉蔵社を建てたという。廃寺になった寺に由来する社が建てられるのは、とても珍しいことである。



左から稲荷社、摩利支天社、金比羅社

さらに階段を上ると、凹凸がはっきりした狛犬の奥に社殿。社殿の左には、名木古木の^{いなりしゃ}イチョウの後ろに境内社の^ま稲荷社、^{りしてんしゃ}摩利支天社、^{こんびらしゃ}金比羅社が並ぶ。社殿の右側に行くと、熊野神社縁起の表示板があり、詳しい説明が書かれている。振り返ると中原

から杉田の町並みがよく見える。昔は海がもっと近かったことだろう。

年間の行事は、1月1日元旦祭、2月祈年祭、3月泉蔵社祭、5月摩利支天祭、8月大祭、11月23日^{にいなめさい}新嘗祭がある。

8月のお祭りは、奉賛会と町内会が祭礼実行委員会をつくって協力して開催している。

社殿の装飾に
注目。不思議
な玉があるよ

能野神社

丘からの眺望は
磯子の市内が最高！



お囃子は子ども主体に、軽トラックに乗って演奏しながら神輿と一緒に巡行する。笛は大人が吹き、太鼓は子どもが叩くというスタイルだ。大昔にあったお囃子会が一時廃れてしまったので、神田囃子森保存会に教えを乞い再興させたという。

昭和初期に作られた宮神輿を担ぐのは、中原神輿睦だ。メ

ンバーは地元中原の人が多いが、他の地域の人もあるそうだ。夏から秋にかけて 6～7回は他の神社の神輿巡行も手伝いに行っているとのこと。昔は娯楽が少なかったので、お祭りでは大いに盛り上がった。男性もお化粧をして、きれいな色の浴衣を着て神輿を担いで海まで入っていたそうだ。若い女性は「手古舞^{てこまい}」を踊り、吹き流しや旗で飾り付けた船も 6～7艘出たということなので、さぞ賑やかだったことだろう。

昔は四季折々の行事ごとに地元の神社を訪れたものだが、時代が変わって今は、七五三などでも多少遠くても有名な大きい神社へお参りする人が増えているが、初詣には小さくても地元の神社に大勢の人が訪れ賑わいを見せるそうだ。



平成 30 年の例祭の様子



根岸湾埋立前、お神輿は海に入っていた『浜海道』(磯子区役所)より

⑩江戸の祭礼などに出た男装の女性の舞。山車や神輿（みこし）の先駆として行われた

ちょっと寄り道

推理作家・斎藤栄の「執筆殺人供養碑」

熊野神社から参道碑まで戻ってきたら、中原本道を横切り国道 16 号線方面に向かう細い道がある。ここは昔の境川の跡だ。路地の途中を右に入るとれいとうざんとうぜんじ霊桐山東漸寺がある。仏殿（釈迦堂）は神奈川県的重要文化財で、禅宗様仏殿としては日本でも最古に属するという。

この墓地に斎藤栄氏が建てた「執筆殺人供養碑」があることはあまり知られていない。400 冊以上の作品がある斎藤氏は、年間に 30～40 人くらいの人を小説の中で殺してきた。その被害者たちの霊を弔うためにこの碑を建立したそうだが、そのデザインがすごい。見開きにした本に短剣が刺さっているのだ。そして本にはこう書かれている。

「人の心こそ最大の謎である」

この言葉には斎藤氏が『神さまへの手紙』のなかで注釈をつけておられる。人の心とは《他人や人間の心》ではなく、実は《自分自身の心》であると。

自分とは何か？を真剣に考えてきた作家の言葉だ。（Y.T）



重要文重要化財の仏殿



永仁の鐘
これは除夜用に作ったもので
実物は釈迦堂に安置している



執筆殺人供養碑



人の心こそ
最大の謎である

ユニークな狛犬がある

杉田八幡宮

磯子区杉田五の二の一



JR 新杉田駅から国道16号線に出て金沢区方面に200mほど行くと、JRのガード下に「旧杉田劇場」の表示板がある。ここには、娯楽のなかった戦後すぐの頃、加藤和枝（のちの美空ひばり）が舞台に立った杉田劇場があった。現在の横浜市

磯子区民文化センターの杉田劇場という愛称は、この劇場を懐かしんでつけられた名前だ。そこからさらに進んだ「杉田八幡宮入口」交差点を右に入ると、正面に杉田八幡宮が見える。

平安時代後期、前九年の役で源頼義^{えき}、義家親子が奥州安倍氏を平らげた。陸奥^{むつ}に国土着の有力豪族だった安倍氏が朝廷に逆らう態度を見せたことに端を発した戦いは、長いものとなった。苦労の末の戦勝を祝って、河内源氏の氏神である京の石清水八幡宮^{いわしみず}を勧請し、父の頼義公は相模国に若宮八幡宮を建立。そして、社伝によると、嫡男義家公はここ武蔵国に杉田八幡宮を建立したという。石清水八幡宮で元服したことから八幡太郎と呼ばれる義家公は、源頼朝公の4代前のご先祖だ。頼義公が建てた若宮八幡宮は今、鎌倉の鶴岡八幡宮となっている。

時代は下って江戸後期、『新編武蔵風土記稿』によると、八幡社は「村の鎮守」で、「社後の山上より眼下に梅林を臨み」、花の時期はその眺めがとても美しかったそうだ。別当は

間宮山妙観寺。杉田八幡宮の三浦宮司によると、この寺は、間宮氏第 7 代の信広が神社を再興した時に、神社に向って右側に建てたものだという。間宮山の名の由来だ。「間宮」と言えば、上中里神社のある丘の中腹にも「間宮寺」と刻まれた石碑がある。現在の磯子区南部と間宮氏の関係の深さをここでも知ることができる。

また、妙観寺第 15 代の^{きいついんにちゅう}帰一院日冲が村の有力者と話し合っ



したという話も伝わっているようだ。その後、明治初年の神仏分離令により、僧侶が神職を兼ねられなくなったため、^{ふくしよく}復飾（僧侶が還俗して僧職を離れること）して三浦姓を名乗ることになった。妙観寺は墓地を持っていないし、近くには妙法寺もあるので、地元と話し合っ

て妙観寺を廃寺にした経緯があるようだ。現在の宮司は 18 代目とのことである。

鳥居をくぐると、右には手水舎、社号標、そして三浦豊壽像が並ぶ。豊氏は先代の宮司で、『屏風浦郷土誌』、『郷土のともしび』といった地元の歴史を本にまとめた方でもある。

階段を上ると、「明治百年記念」の文字が赤々とした玉垣に囲まれた境内だ。左右には^あ狛犬、右に^{うん}阿形、左に吽形がある。その先には、フェンスに囲まれた立派な石灯籠が左右にある。嘉永 5（1852）年と彫られているから、ペリーが黒船で日本にやって来た前の年だ。「家内安全、子孫長久」の文字もある。門の脇のスペースには、石が三つ並んでいる。昔の若者が力自慢で持ち上げた力石だろうか。歌が刻まれているようなものもある。

社殿の脇には、もう一對の狛犬がちよこんと鎮座している。普通のいかめしい狛犬とは違って一見カエルにも見える可愛いものだが、侮るなかれ。実は、元禄 5（1692）年に作られた大変珍しい



和様狛犬で、横浜市登録地域有形文化財に登録されているものなのだ。背の刻銘によると、妙観寺初代住職の義浄院日章ぎじょういんにっしょうが寄付したものだ。

境内は、隣接する杉田幼稚園の園庭も兼ねているので、子どもたちで賑やかだ。社



殿に向って右側には、猿田彦大神の石碑もある。社殿左の山裾の赤い鳥居の奥には、末社の稲荷神社も祀られている。広い敷地の奥は神楽殿だ。祭礼時の祭囃子や奉納演芸の舞台になる。

年間の行事としては、1月1日の歳旦祭さいたん、2月の初午祭はつま、そして8月第四土・日曜日の例大祭がある。

例大祭は神様のための式典が中心で、神輿やお囃子などがそれを盛り上げている。雅楽と舞は、伊勢山皇大神宮から来てもらって行っているそうだ。周辺の町内で同日一斉にお祭りが開催されるため、あち



こちで盆踊り大会などもあり、杉田の町はとても賑やかになる。

お神輿は、杉田八幡宮神輿保存会会員約 30 人が中心となり、中原、森、磯子、滝頭、金沢区の富岡、町屋など区内外から応援に来て、延べ 300 人が参加する。お神輿は宮御輿や町神輿などいろいろあり、一台につき 80~100 人程度の人が交代で担ぐ。らびすた新杉田横の広場で、半纏はんてんを貸し出しして担いでもらう神輿体験会も行っていて、そこで入会する人もいる。会には見習い制度があるので、若い人はそれに耐えられず、担げるようになる前にやめてしまうこともあるそうだ。

お囃子は神田囃子森保存会に依頼して演奏してもらっている。10時から18時までの神輿巡行の時は、車に乗って踊りとともに演奏する。神楽殿で行われる演芸は、杉劇リコーダーやロックバンドなど地元ミュージシャンの発表の場でもある。出演希望者が増え続けているが、時間が限られているのでなかなか難しい。



お祭りのもう一つのお楽しみが露店。とくに、子どもたちには大盛況で、参道前の両側に並んだ出店には人がたくさん集まり、なかなか神社までたどり着けないほど。

お祭りには多額の費用がかかる。神社を支えるのは町の人だ。と言っても自治会・町内会と神社・総代会は別組織なので、杉田地区ではそれぞれの地域事情に応じて協力を依頼しているという。お祭りや初詣を通して、新しく住民となった人たちにも興味をもってもらえる嬉しいとのことだ。



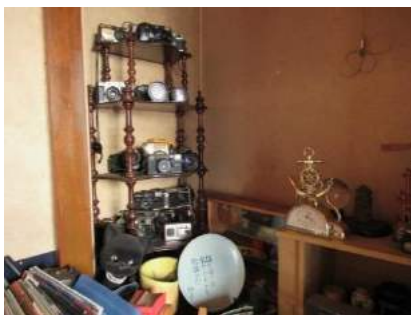
ちょっと寄り道

ギャラリー喫茶「ラパン・アジル」

杉田の聖天橋交差点から金沢方面に向かって 16 号線を進み、根岸線のガードをくぐると右側にギャラリー・スナック喫茶「ラパン・アジル」がある。パリのモンマルトルに集った貧しい画家たちのたまり場から名付けた喫茶店だ。



店主は元報道カメラマンということで、棚には昔のカメラが飾られている。杉田劇場で展示会を開催している写真愛好家グループを支援しているが、店内ギャラリーの運営者としての活動にも忙しい。



「ラパン・アジル」では絵画展や写真展のほかに詩の朗読会なども開催している。店内には詩集、同人誌のほかに懐かしい写真集なども置いてあるので、ビールやコーヒーを飲みながら、あるいは軽食をとりながら、ゆったりとした時間を過ごせる。LP レコードから流れる懐かしい音楽も心地よい♪

最近ではコロナ禍のためできないが、小さなコンサートも好評だという。(Y.T)



古くて新しい神社

若宮御霊神社

磯子区洋光台一の二三の四九



笹下釜利谷道路の「洋光台入口」交差点を金沢文庫方面に向かい、右手マンションのすぐ脇に若宮御霊神社の案内板が立っている。私道のように見えるこの道が、若宮御霊神社への入り口。

最寄りのバス停は「田中」で、ここからマンションの裏手に見える木が茂った所が神社だ。

この神社は今では洋光台一丁目に立地しているが、『新編武蔵風土記稿』には、元々は若宮八幡社と御霊権現社の別々の二社として、松本村（現港南区）にあったと

書かれている。若宮八幡社は村民持。御霊権現社は、天文年中（1532～1555年）に間宮氏の鎮守として建てられ、泉蔵院（今の中原の熊野神社がある所）が別当を務めたとある。どのようにして一社になったのだろうか。

みこし
神輿蔵を通り過ぎ、神社



の入り口に差し掛かると、社号標の横に来歴が書かれた碑がある。それには、二社が神社統合令により明治 41（1908）年に港南区の天照大神に合祀され、元の場所は地元の人に陰宮^{かげみや}®として守られてきた。そして、平成元（1989）年に現在の場所へ社殿を再建し遷宮^{せんくう}した、とある。合祀されてしまった後も住民は自分たちの氏神様を大切に思い、元の場所へ帰ってほしいと長年願った結果のことだった。遷宮祭が行われることは、神奈川新聞の「わが街の鎮守 81 年ぶり復活」という記事にもなり、当日は、袴姿の大人や稚児行列などで盛大に開催されたそうだ。

来歴の続きによれば、その後も容易に「若宮御霊神社」になったわけではないようである。当時、境内地が個人の所有だったため、将来を考えて宗教法人化を目指した。しかし、二社の名前では法人申請は不可とのことなので、まず名称を篠木^{ささき}（笹下の古名）としたのが平成 3 年。法人化にはほかにも色々要件があったので、神社としての実績を作るために毎年お祭りを開催したり、土地所有権の整理をしたりと非常な苦勞の末、平成 18 年にやっと認可されたということだ。その間に名称を若宮御霊神社に変更



神社前の道 かつてここは川だった



鳥居と社殿



庚申塔、御嶽弘明講社の碑など

したとのことである。

昭和 50 年代に開発が進み、古くからの住民と共に神社を守る新しい住民が増え、平成 30 年には本殿と手水舎の改修もできたそうだ。運営に携わる氏子の人たちが率先して掃除やアジサイなどの植樹も行っていて、どの季節に訪れてもきれいに保全されている。

®御神体が他所へ移ったあとの祠

境内には、元禄 14 (1701) 年、^{てんぼう}天保9 (1838) 年の庚申塔、不動明王が刻まれた石碑などがある。また、社殿に向って左には、「若宮八幡宮 御霊権現社 由来」碑があり、笹下城の間宮氏と神社の関係を知ることができるので、一読をお勧めする。由来碑の裏には、社殿の後ろ側へ抜けられる道もある。



背後から見た社殿

年間の三大大行事として、歳旦祭 (1月1日)、どんど焼き (1月15日前後の土日)、例大祭 (9月22日、23日) がある。ほかには、初宮参りや七五三のお参りを宮司への事前申し込み制で行っている。

実行委員会方式で開催する例大祭の時には、灯籠まつりを同時に行っていて、手作りの130ほどの灯籠とそれ

以上の数のキャンドルを飾っている。神輿蔵に保管している大人神輿と子ども神輿は、隔年で巡幸する。

宮司は森浅間神社の松本氏が務め、持続可能な神社を目指しているという。「規模に見合った」、「今あるものを大切に」、「行事を大事に継承していく」ことだそうだ。神社とお祭りは、異世代の地元の人たちの間に結び付きをつくるもの。「宗教」にこだわらず、地域の中心として、または精神的な支柱、交流の場にしていきたい。また、子どもたちにとっても、この



ような神社の存在やお祭りの日が大切な記憶になれば、という思いがあるそうだ。訪れる人のために参道に手すりをつけるなど、工夫されているのを見ると、暖かい気持ちを感じることができる。

ちょっと寄り道

「幻の」笹下城

戦国時代、北条早雲の家臣だった川崎堀之内城主・間宮信元が築城した笹下城。城と言っても、現代人が想像する天守があるような城ではなく、砦のような山城だ。

今の港南区笹下から洋光台、栗木あたりまで広がっていたとされるが、宅地開発により遺構がほとんど失われてしまい、確かなことはわからない。

大岡川や左右手川を天然の堀とし、笹下の成就院裏の丘が本丸で、その南にかけて屋敷などの関係施設があったとされる。海を渡って攻めてくる里見氏に対抗するため、間宮氏は、森や杉田にも陣屋を築き、一族に防衛させたという。若宮八幡社も御霊権現社も、間宮氏の守り神として笹下城域に建立されたものだ。(M.S)



(左) 梅花山成就院 山門は、間宮氏の屋敷にあったものを移築したと伝わる
(右) 墓地になっている丘が本丸跡と言われている



成就院横にある笹下城空堀跡と言われる道



空堀の説明板

矢部野の雰囲気が残る

金山神社

磯子区洋光台三の三五の一〇



笹下釜利谷道路を金沢文庫方面に進み、「田中」バス停を過ぎた所の右に入る細い道が、昔の矢部野のメインストリートだ。ここから峰の白山神社を通り、鎌倉まで続く街道だったという。矢部

野とは、この辺りが宅地開発され洋光台となる前の古い地名で、現在の磯子区内に江戸時代にあった村名の中で、唯一残らなかった地名でもある。洋光台駅前の通りにかかる「矢部野橋」、NTTの電柱に貼られたケーブル名表示「矢部野」などにその痕跡がある。金山神社はそのメインストリート沿いにあり、笹下釜利谷道路から上る道は古道の趣が残っている。土手で囲まれたり、植木が立派だったり、また邸内社だろうか、門から宅地



洋光台側からの入り口



笹下釜利谷道路からは古道の雰囲気が残る

の中に鳥居が見えるお宅もある。周辺は古くからの住人が多そうだ。

住宅地の中で大きな木が目立つ所が神社だ。洋光台方面から向かう場合は、「洋光台第 1 小入口」交差点少し手前の案内板が出ている道に入る。ご祭神の一かなやまひこのかみ柱である金山比古神は鉾山や鍛冶の神なので、鎌倉時代にこの辺りで武器を生産していた集団が祀ったのではないかとされている。境内にある横浜市の名木古木のヒノキやイチヨウが、その年代を感じさせる。『新編武蔵風土記稿』には、金山権現社として名前が載り、あきば ご ず てんのう あいどの秋葉牛頭天王を相殿¹⁹とし、森中原村泉蔵院（今の熊野神社の所）持、とある。



金山神社の全景

この神社も他の上笹下六か町の神社と同じ運命をたどり、明治 45（1912）年に栗木の日枝神社へ合祀され上笹下神社となり、戦後の昭和 22（1947）年に氏子の総意により元の地へ矢部野神社として再建した。その後、昭和 32（1957）年に金山神社と改称し、現在に至っている。



手水もかわいい



この神社にある
稲荷社の赤い
鳥居が素敵

神社を運営しているのは奉賛会という氏子組織で、矢部野の頃からの住民を中心に続いてきたが、数年前に募集をしたら、新しく 60 人ほども入会してきたそうだ。熱心な人が多く、中には毎日参拝する人も。町会と神社は別組織だが、一体となって行えるように、「お祭りとは何か？」から議論を重ねているということだ。

¹⁹同じ社殿に 2 柱以上の神を合わせて祀ること



社殿と神楽殿

境内を囲む土手をきれいにしたり、
ちょうずばち
手水鉢を新調したり、年々整備が進んでいる。社殿右には境内社の稲荷社、左には神楽殿がある。

年間の三大行事は、彼岸に行く例祭、正月 2 日の新年祭、2 月の初午の日に行う稲荷祭。その時には、熊野神社の杉原宮司が来て神事を執り行う。

例祭では、新しい試みとして、3 年前（平成 29 年）から提灯をつけるようになった。お祭りが寂しいとの声があったので、お祭りの 1 週間前から点灯して賑やかになっている。境内が小さいので、屋台などをたくさん出すことができないため、子どもに神社を知ってもらうことを目的に無料の菓子釣りを実施している。昔は神輿を担いで現在の洋光台三丁目町会エリアを回っていたそうだが、今では担がずに飾っている。社殿にかける幕には「矢部野町 しのぶ会」の文字があり、ここにも矢部野の痕跡を見ることができる。

大晦日は夜 10 時から翌朝にかけて甘酒を振る舞っている。1 月 2 日の新年祭には、神事とお囃子の演奏を行う。昔は、お囃子と獅子がセットで町内の各家を回り、祝儀をもらったものだそうだ。



祭礼では関古式囃子保存会が演奏



社殿から見た街並み

例祭や新年祭には「関古式囃子保存会」に出演依頼をし、奉納演芸を行っている。演目は、獅子舞、キツネ、ヒョットコなどで、一通り行くと 20 分ほどかかる。「関」は字名。昔は「笹下古式」という名称で、笹下の人が発起人だそうだ。金山神社とのつきあいは長く、7, 80 年になるという。その演奏は秀逸なので、一見の価値ありだ。

ちょっと寄り道

昔のメインストリートにある村中地蔵、薬王寺

金山神社から洋光台方面への大きな通りに出ると、昔のメインストリートは宅地開発の余波で道筋が変わってしまっている。「洋光台第1小入口」交差点から1本目の道が、ほぼ昔の道だと思われる。なぜなら、しばらく進むと「村中地蔵」がブロック塀の中に忽然と現れるからだ。矢部野村の真ん中にあつたため、村中というらしい。^{きょうほ}享保4（1719）年に作られたもので、花や人形などが供えられている。

村中地蔵を過ぎ、そのまま突き当りまで行くと薬王寺がある。六地蔵や庚申塔が並ぶ、由緒のありそうな寺だ。薬王寺は鎌倉時代末期に矢部野村に建立されたと伝えられるが、のちに移転したようで、江戸時代には田中村にあつた。現在地には元々は来迎寺が^{らいごうじ}あつたが、明治の頃は廃寺となっていた。同じく矢部野村で廃寺となっていた^{きんざんじ}金山寺と合せて来光寺を別の場所に建立したが、団地造成で取り壊されたため、昭和46（1971）年に現在の地に再建した。その後、平成6（1994）年にこの地は薬王寺となった。二つ（元は三つ）の寺が一か所にあるという珍しい歴史の証人だ。（M.S）



旧メインストリートと村中地蔵(左)



ブロック塀の中のお地蔵様



薬王寺



再建された来光寺の本堂

街道沿いの鎮守さま

田中神社

磯子区田中二の六の二五



JR 洋光台駅を降りたら裏に回り、線路に沿って新杉田方面に進むと、弁才橋に出る。弁才はこの辺りの字名だが、由来はわからない。この橋を左に行き、道を渡ると「田中神社 300m」の案内板がある。矢印の方向

に進み、しばらくならかな坂を上ると、右に入る細い道がある。この道が、かつて鎌倉へと通じていた古道「鎌倉道」だ。その先は、ここまで歩いて来た道を横切り南西へと鎌倉に向って延びていたが、残念ながら宅地造成で失われてしまった。その鎌倉道に入り、道なりに進むと整然とした玉垣が印象的な田中神社に到着する。一段高い所にある大



洋光台からの道案内



この道がかつての「鎌倉道」

田中神社



この狛犬は
大変立派です
平成生まれの犬だ
そうです



きな木が目印になる。周囲には古くからの区画が残り、先祖代々住んでいるお宅が多そうだ。静かなたたずまいが残る古い道なりが懐かしい雰囲気、最近では散歩のコースにする人も増えているらしい。

鳥居は鎌倉道を下ったかねさわ道方面を向いているので、道からは社殿や境内を横から見る形になる。階段を上がると右に手水舎、左に鳥居。また、階段の途中にある石灯籠や階段上の狛犬もすべて平成 13（2001）年に寄進されたものだ。

鳥居の横には大きな「田中神社 由来」碑がある。それによると、ここには田中村の鎮守だった御獄社みたけしゃがあった。しかし、明治 45（1912）年に他の上笹下六か町の神社と同じように、村にあった神明社と共に栗木の神社に合祀され、

上笹下神社となった。戦後、それぞれの場所で氏神様を祀ることになり、昭和 22（1947）年に元の地へ遷座した。町名をとり名称を田中神社としたそうだ。昭和 35（1960）年に社殿を造営し、お祭りも盛大に行っていたが、同 46 年に火災により社殿が焼失してしまった。同時に、昭和 8（1933）年に上笹下六か町で一緒に作った神輿も燃えてしまったそうだ。その後、社殿は再建されたが、お祭りのことは忘れられてしまった。

そうするうちに、町の発展に伴って神社の復興再建の気運が盛り上がり、平成 13 年に社殿の修復と境内地の整備を完成させ、現在に至っているということだ。大人用と子ども用の神輿 2 基も同時に新調した。復興に至るまでの熱い思いは、碑の裏面「田中神社の復興」に詳しく書かれている。



田中神社の由来



ガス灯？



社 殿



境内から見た街並み
根岸湾の工場の煙突も見える

神社由来碑と手水舎の間に一本、階段上の狛犬の左に一本、ガス灯のような物が立っている。気がつけば「なぜ神社に？」と思うかもしれないが、違和感もなく周囲の景観と調和がとれているのが不思議だ。社殿前にはひときわ大きな木が植わっている。振り向くと、栗木から杉田の彼方まで住宅の連なりが見通せる。

神社の前の道をそのまま下っていくと、笹下釜利谷道路へと続く。その途中も古道の趣がある。木に囲まれた一角には、この辺りに古くから住むお宅の共同墓地もあり、墓石はかなり古く「元禄」など江戸時代の年号が刻まれているものもある。笹下釜利谷道路との合流地点にも「田中神社 300m」の案内板がある。

年間の行事には、正月の初詣と新年祭、どんど焼き、8月の夏祭り^{なつまつり}と祭礼、11月の七五三、12月の御札配布と年納があり、季節ごとに楽しめる。そのうち、兼務の中原・熊野神社の杉原宮司が来て神事を行うのは、1月2日の新年祭、8月の祭礼、11月の七五三だ。

祭りは、第一土日に開催。町内会と奉賛会の役員で実行委員会を立ち上げて運営している。以前は、一年おきに9月20日に神輿、8月第一土曜日に盆踊りをしていた。神輿が出る年は盆踊りはなし、盆踊りのある年は神輿はなしだったそうだ。しかし、地元の人の中で、なぜ一年毎なのかという意見が出たので、数年前に日程を8月第一の土日に変更し、神輿と盆踊りを一緒に開催するようになった。夏祭り会場は、左右手公園^{そうて}。現在は、近年の猛暑の影響で、夏の神輿担ぎは希望者がいれば開催を検討するとのことである。お囃子の演奏は、隣の栗木の「くるぎ囃子」が応援に来てくれている。

七五三は、町内会の回覧で知らせて募集され、当日には、奉賛会の役員も立ち会ってお祝いしてくれる。

ちよっと寄り道

鎌倉道とかねさわ道

杉田八幡宮、中原の熊野神社、森浅間神社、岡村天満宮と、磯子区内には源氏ゆかりの神社がある。鎌倉から山を越えるだけで到達するこの辺りは、鎌倉幕府にとって重要な拠点の一つだったのだろう。「鎌倉道」と呼ばれた道が、田中、洋光台、峰の開発を逃れた地域に残っている。

「かねさわ道」は、保土ヶ谷宿の中ほどで東海道から分かれ、今の南区、港南区を通過して磯子区に入り、金沢区まで通じた古道だ。当時の道筋が残っているのは、笹下釜利谷道路の港南区笹下三丁目の新川橋から磯子区方面を向いて左に入り、道なりに進んで栗木一丁目まで再び笹下釜利谷道路に出る区間と、JRのガードと環状三号線を渡



「かねさわ道」(田中1丁目) 右は大岡川

った先、トヨタ販売店手前を左に入り、道なりに進んで金沢区の富岡ひかりが丘公園の脇を岩船地藏に至る辺りの区間である。その先は能見台の開発により道筋はすっかり変わってしまった。

道はほぼ大岡川に沿って進む。秋には紅葉が美しい道。

(M.S)



「かねさわ道」表示板
(田中一丁目)



笹下釜利谷道路に出る手前の土手に馬頭観世音碑がある



(栗木一丁目)

茅葺屋根が珍しい

栗木神社

磯子区栗木二の二三の二二



JR 洋光台駅を新杉田方面へ線路沿いに進むと、やがて丘に突き当たり階段がある。そこを上り左のほうに行くと、一段高くなった所に名木古木のマテバシヤやスダジイをはじめとした木々が茂る鎮守の森、栗木神社だ。笹下釜利谷道路から

は、バス停「栗木」そばの、金沢文庫方面に向かって右手にある「塩戸橋」を渡り、金台寺の脇を通って洋光台ハイタウンを横切って神社へ行く。この金台寺は、栗木神社の例祭の神輿巡行のときには休憩地点となり、住職もお祭りに参加して神輿を担ぐという、地域に密着したお寺だ。また別の道に、「栗木2丁目」交差点を金沢文庫に向って右の

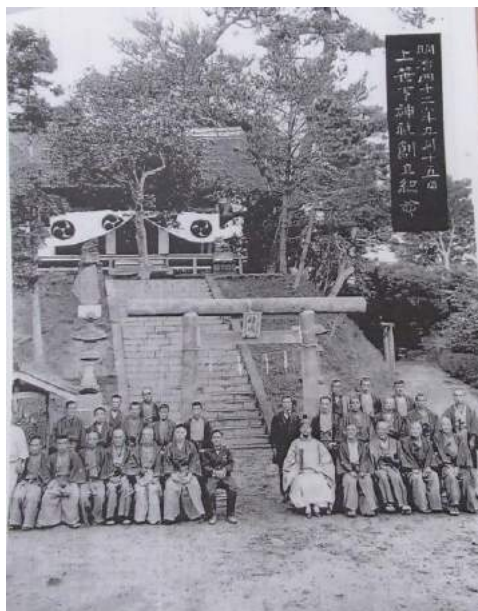
急坂を上り、栗木町内会館の前を通って神社の背後から回るコースもある。



笹下釜利谷道路の道案内

古くには、この辺りの田中、栗木、矢部野（現洋光台地域）、上中里、峰、氷取沢の各村は合わせて、久良岐郡上笹下郷と呼ばれていた。明治45（1912）年、国の方針により、上笹下地区の神社はすべて、栗木の日枝神社

に合祀され、上笹下神社となった。その後、六か村で一緒にそれぞれの神輿を作り、昭和 8（1933）年に完成した。戦後の昭和 22 年、六社が再び元の地へ戻り、現在に至っているが、その経緯から今でも結び付きがとても強い。田中神社、栗木神社、金山神社、上中里神社、峰白山神社、氷取沢神社の氏子会の集まりである「上笹下六ヶ町神社会」を平成 22 年に結成し、連絡を密にしている。平成 25 年には、一緒に神輿を作ってから 80 周年を記念して、神輿を 6 基集めた大合御だいごぎよを行った。



熊野神社の宮司、村長、地域の議員が写っている記念写真(明治 42 年 12 月 15 日)

昔あった栗木の日枝神社は、『新編武蔵風土記稿』では山王社とあり、村民持ちの鎮守だった。平成元年に古い社殿を直した時に、出てきたのが、「文化十年 大工中里村富五郎」と書かれた棟札と「弘化四年 大工 中里村友吉」と書かれた天井板で、いずれも今の上中里町に住んでいた大工による作だったことがわかった。



栗木神社
市内でも貴重な茅葺屋根を持つ神社
平成23年60年ぶりに葺き替えた

鳥居のある正面には、社号標や「神社歴」碑がある。鳥居に寄り添った大正 4（1915）年植樹のカエデが美しい。手水鉢は元治元（1864）年のもの。階段脇には大きな石灯籠。階段を上りきると、右に阿形、左に吽形の狛犬。いずれも年が刻まれていないが、古そうなものである。

市内に二つしかないという珍しい茅葺屋根の社殿。今の屋根は平成 23 年に総葺き替えしたものだ。社殿の左側には

境内社の伏見稻荷が祀られていて、その参道にずらりと並ぶ赤いのぼりは壮観だ。

社殿の右に回ると、古そうな四ツ目菱紋のある手水鉢。右が卍形、左が阿形の、これまた古そうな狛犬がある。阿形の台座には「鎌倉材木座村 石工？ 右衛門」の文字がかろうじて読めるが、年記はわからない。こちらにも女坂だろうか、階段がある。下へ降りた先には明治に奉納された石灯籠がある。

年間行事は、1月2日新年祭、13日どんど焼き、2月11日伏見稻荷初午祭、9月中旬例祭と神輿渡御だ。神社の運営は町内会とは別組織だが、お祭りも町内会の盆踊りも神社と町内会が協力して開催している。「子どもを大事にすると町が良くなる」をモットーに地域と密着して一体でやっている。町内のみんなで子どもを育てると、町がしっかりするからだ。

例祭や神輿渡御では、くるぎ囃子会と栗木御輿愛好会が活躍する。平成元年の社殿修復の時に、昭和の初めに作った神輿が金属供出で飾りもなくぼろぼろの状態だった

ので、直し始めたのが御輿愛好会の始まりだった。いまでは、栗木甚句と万灯神輿というこの地域独特の神輿渡御もある。

「御輿愛好会」はお祭りの時だけではなく、町内会の子ども向けのイベントや運動会も主催や協力をしているそうだ。途絶えてしまっていたお囃子の復活運動を開始させたのは、平成10年のこと。縁あって港南区の永谷天神囃子のメンバーに師匠になってもらえて、平成14年にくるぎ囃子会を立ち上げた。演奏は、栗木神社のお祭り以外でも、上笹下地区の賀詞交換会や他地区のお祭りで聞くことができる。



万灯神輿



令和元年の宵宮祭 くるぎ囃子の演奏

ちょっと寄り道

イル・デ・パン本店

大岡川の奥、あまり交通の便が良いとはいえないところに、お客さんがひっきりなしに来店するパン屋さんがある。栗木神社から 400mほどの笹下釜利谷道路、通称「ささかま道路」という美味しそうな名前の道に面して建つ「イル・デ・パン」だ。

このパンはどれも美味しいのだが、早いうちに売り切れになってしまうこともあるカレーパンがおすすめ。普通、カレーパンというと小判型が多いけれど、こちらのは球体！ しかも大きい。

皮はパリパリで、かぶりついた瞬間ザクツという音に興奮してしまう。印象的なのは中に入っているゴロっとしたチキン。パン生地やカレーとの相性も良く美味しい。一昨年、杉田商店街に支店がオープンしたので、近隣の方々には買いやすくなった。(Y.T)



まん丸のカレーパン



二つに切ったらカレーと一緒にチキンが出てきた



本店：磯子区田中 2-25-6 黒川ビル



支店：杉田商店街プラムロード

境内からの眺望がすばらしい

峰白山神社

磯子区峰町六二三



JR 洋光台駅から環状 3 号線に出て港南台方面へ向かい、左手の山の上に峰白山神社はある。横浜横須賀道路を跨ぐ「峰の橋」のすぐ側で、橋を渡れば港

南区という位置だ。最寄りのバス停は「洋光台 6 丁目」。洋光台南郵便局の横の坂道をまっすぐ上りきり、緑が多く残された静かな山裾を進むと、阿弥陀寺あみだじの案内があるので



そちらへ向かう。左側のコンクリートで固められた斜面一帯が実は神社なのだが、下からは社殿が見えないので気づきにくい。古道の面影のある道を抜けると神社の入口に到着する。峰という地名通りの高い場所だ。

洋光台の開発が始まるまで、この辺りには農家が多かった。広い畑で野菜、菊やグラジオラスなどの花を栽培して、作物はリヤカーに積んで移動販売をしていた。子どもたちも、花を育てる時に「めかき」という小さな芽を切る仕事を手伝っていたそうだ。

鳥居の横の駐車場には「阿弥陀寺
駐車場」と書かれている。向かいにある
阿弥陀寺のものだ。峰に古くから住む人
の多くが菩提寺としている阿弥陀寺と
峰白山神社の関係は深い。

『新編武蔵風土記稿』には、稻荷社
と白山権現社が「阿弥陀寺の持」とある。
寺の管理下にあったという意味だ。神社
の境内地も元々阿弥陀寺のもので、天
保 15（1844）年に阿弥陀寺の住職が、今の環状 3 号線の洋光台 6 丁目交差点
近くにあった社を^{やしろ}現在地へ移したということだ。その時の棟札には「当社は鎌倉繁栄の頃
より」と書かれているようで、700 年以上もの歴史があることになる。



鳥居の向うに阿弥陀寺が見える



令和元年の台風で損壊してしまった社殿の
屋根(令和 2 年 10 月現在)



社殿に向かって左側の境内社は大地神
西には富士山の雄大な姿が

明治初年の神仏分離により、阿弥陀寺
の管理を離れ、村の鎮守「白山神社」となっ
た。その後、他の上笹下六か町の神社と同
じように、明治 45（1912）年に栗木の日
枝神社に合祀され上笹下神社となったが、
昭和 22 年に、その頃は忠魂碑があるだけだ
った元の地へ遷座し、社名を峰白山神社と
したそうだ。

階段を上ると、中ほどに町内会館を兼ね
た社務所がある。階段を上りきると、そこには
見晴らしの良い平場が開けている。中央に
峰白山神社の社殿。右には境内社の御嶽
大神、その向こうには根岸の石油コンビナ
ート、さらには遠くベイブリッジまで見える。左に
は^{だいちしん}大地神の祠、その先には富士山と丹沢山
系が見渡せる、素晴らしい眺望である。

この神社は「世話人会」により運営されて

いて、メンバーは昔からこの地に住む 30 人ほどが中心だ。屋根の修復もこの世話人会が中心となっている。メンバーは、もちろん町内会にも所属して役員なども務めているが、神社の行事などは町内会組織とは別に神社主体で行っていて、他の地域のように実行委員会制をとっていないそうだ。

宮司は、岡村天満宮の杉原氏が兼務していて、8月16日の例祭、11月23日の秋祭兼七五三の折には来社して神事を行う。



社殿に向かって右にある御嶽大神。遠くベイブリッジまで見渡すことができる。



めずらしい鉄筋コンクリートの社殿です(昭和44年)なんと700年ほど前の建立(神皇正統記)

例祭は、その昔は9月16日に秋祭をしていたが、今は8月16日に固定して行っている。土日でなくても、お盆休みのため、人が集まるそうだ。里帰りの人も楽しみにしている。前日の15日は盆踊りや夜店がある。子供に菓子を配ったり、風船割りゲーム

などをしたりもする。そして、16日が本祭。宮司が来て神事を行う。昔は神輿を担いでいたそうだが、今はお囃子の演奏や神輿渡御などはなくなってしまった。元は峰町だった今の洋光台6丁目の住民も、声がかかると行事に参加しているそうだ。



平成30年のお祭りの様子

秋祭兼七五三では、七五三は毎年一人いるかどうかだが、離れて住む住民の孫が来たりもする。還暦、古稀などの敬老行事も一緒に行っているそうだ。

正月には宮司による神事はなく、12月31日夜から、世話会有志が交替で参拝者へ甘酒や御神酒を振る舞っている。

ちょっと寄り道

横浜横須賀道路と馬頭観音

峰白山神社へ向かうこの辺りには、今では正確にはわからないが、鎌倉へと通じたその名も「鎌倉道」という古い道があった。「阿弥陀寺」案内碑の前で振り返ると、下に横浜横須賀道路が見える。新旧の道の対比が面白い。

「峰の橋」のたもとには、コンクリートの柵で囲まれた石仏群が残っている。何かの神を祀る祠、庚申塔、馬頭観世音などだ。恐らく、開発の時にあちこちからこの場所へ集められたものだろう。柵があるため詳しく見ることはできないが、風化が進み、かなり古そうだ。馬頭観音はその名前からも馬の守護神として祀られることが多い。昔、この急な山道を荷物や人を乗せて行き交った馬たちの姿を思い描いてみよう。(M.S)



かなり下の方を通る横浜横須賀道



庚申塔や馬頭観世音などが集められている



左: 庚申塔
中: 何かの祠
右: 馬頭観世音

不動明王を祀る

上中里神社

磯子区上中里町四四一



高い丘に挟まれてうねうねと続く笹下釜利谷道路。交差点「杉田台入口」付近、金沢文庫方面に向かって右手に上中里団地から下りてくる一方通行の出口

がある。その道に入ればすぐに上中里神社の入り口が見える。バス停「上中里町」からは徒歩 1 分。

この辺りは江戸時代には「中里村」だったが、同じ久良岐郡内にあるもう一つの中里村（現南区）と区別するため、大岡川の上流にあるこちらの中里村に「上」をつけたと言われている。明治の頃は、この辺りには 28 軒しか家がなかった。職人が多く、宮大工が 5～6 軒、屋根屋が 2 軒あった。栗木神社は中里村の大工が手掛けたという記録が残っている。昔は、大岡川には水車があり、村の人が粉を挽きにやって来た。水車を持っていた家の屋号はクルマヤという。その他にもアブラヤ、テンジンヤマ、ヨコバタケなどの屋号が残っているそう。昔は住んでいる人がお互いに分かったが、昭和 30～40 年代頃から開発が進み、人口が急激に増えた。

入り口から社殿に続く、見上げるような階段は鬱蒼と茂る木々に吸い込まれるようだ。まうっそうず 20 段登った踊り場に鳥居がある。裏側には、寛政八丙辰年九月中旬建とある。今からかんせい ひのえたつ



鳥居の裏には
森村石工三右衛門
六浦石工喜兵衛
の名が

御代（1280年ほど前）に、^{ぎょうきぼさつ} 行基菩薩が^{ふどうみょうおう} 不動明王の立像を彫刻して祀り、^{どうろ} 笹下六か村の鎮守としたと書かれている。その後、江戸時代の初期に堂宇が焼失してしまったが、



夜になると田の中に光る所があり、掘ってみると不動尊像が出てきたので、堂宇を再建し村の氏神として祀ったということだ。階段の中腹に不動明王の石碑があった理由がこれでわかった。



220年以上前の江戸時代に建てられた鳥居だ。鳥居の手前左側には手水舎がある。

手水舎の奥を見ると、頂上へ登るのは別の階段がある。その先はこじんまりした平地で、不動明王の石碑と延宝4（1676）年の庚申塔がある。石碑の横には「不動山間宮寺」と刻まれている。間宮と言えば、戦国の世から江戸時代までこの辺りを支配した間宮氏が思い起こされる。

階段を登りきると上中里神社社殿。社殿の左に由緒が書かれた説明板がある。聖武天皇の

江戸時代に編纂された『新編武蔵風土記稿』によれば、ここは不動堂という名だった。さらに、不動堂の麓には、間宮氏開基の不動山間宮寺という寺があったことも書かれている。

説明板の続きでは、国の方針で明治 45 年に栗木の村社に合祀されて上笹下神社となったが、昭和 22 年に氏子一同の熱望により社殿を再建し、現在に至っているということである。

ご神体は不動明王。脇侍はこんがらどうじ矜羯羅童子とせいたかどうじ制多迦童子。この二童子も、火事の際に



失われていたが、境内の椎の木の洞ごから出現したという。不動明王は五ご大明王の中心的存在で、仏教でいだいにちによらいう大日如来の化身として特に日本で信仰が篤い。

社殿に向って右には、整然と並んだコンクリート造りの「七社の宮」がある。由来標示板によると、明治 45

年に上笹下神社として合祀されると、それまで社殿の北側に集められていた七社（稲荷社・明神社・駒形神社・天神社・山王社・八王子権現社・山大明神社）を各地に遷座し直し、当番制でお祀りしていたという。地元には神社がなくなってしまったので、代わ



りにしていたのだろう。昭和 22 年に神社が戻ってきたので、また集められ、昭和 54 年に七社の宮として祀られたとある。

七社の宮の右には、見逃してしまいそうな階段がある。下りると、はっきりと墓石とわかる 3 基のほか、古い五輪塔を集めたようなものがある。

墓石には「當寺開基」とあり、今はなき間宮寺の住職のものだ。

上中里神社は現在、江戸時代にあった旧家 28 軒を中心に集まった有志 20 人ぐらいで運営していて、境内の手入れも有志で行っている。しかし、令和元（2019）年の

台風 15 号によって、階段や手すりの土台のひび割れ、倒木など甚大な被害があり、修復に苦労しそうだ。

宮司は岡村天満宮の杉原氏が兼務していて、正月の新年祭、9 月 28 日の大祭、11 月 23 日の新嘗祭兼七五三の際に宮司が訪れ行事を執り行っている。

9 月の大祭は神事のみで「お祭り」というイメージはない。昔は、前日の 27 日に宵宮祭（前夜祭）を行っていて、神輿を担いだり、三輪トラックに積んだ山車について歩いたりしたそうだ。また、社務所前が今より広がったので、手水鉢ちようずぼちの所へ白い布をかけて映画の上映会を開催したこともある。映画は、それぞれお祭りの日が違うので、上笹下六か町で順番に回して観たものだそうだ。今は町内会のお祭りとして、7 月に上中里地区セ



昭和 30 年代の上中里 『浜・海・道Ⅱ』(磯子区役所発行)より

ンターで「ザ・祭り」を例年開催している。他の地域のようよに神社と町内会のお祭りを一緒にできるかどうか検討中とのことである。

神輿会では、上笹下六か町で一緒に作った大人の神輿とは別に、子ども神輿も自分たちで設計して作成した。町内会のお祭りで毎年担いでいる。

昭和 30 年代までは、六か町で栗木に集まってお囃子のテレツクテンテンをタイヤを叩いて練習し、それぞれが自分の神社にお囃子を持ち帰っていたものだが、その後すっかり廃れてしまい、太鼓だけ残っていた。笛を吹ける人もいなくなったが、それでもお囃子会を復活させるため、「とまや」（江戸時代から伝承されてきたお囃子を残そうと神奈川県内各地から集まって稽古している会）で習ってきた町内の人に教えてもらっている。実働は大人 5 人、子ども 5 人ほど。子どもは、さわの里小学校にも声掛けをして集めているが、中学生になると部活や受験で忙しくなりやめてしまうのが悩み。町内会のお祭りで、地区センターを出発し町内一周の演奏をしている。

ちょっと寄り道

さいど 賽戸神

バス停「上中里町」を金沢文庫方面に進むと、左側に車止めのある道がある。奥には防災用具置場と書かれた倉庫が見える。目的がないと入らない道だ。進んでみると、大岡川沿いの倉庫の横にフェンスで囲まれたほころ祠のようなものがある。「賽戸神」という標柱が立っている。さいどがみと読むのだろう。塞の神、道祖神は、悪いものから村人や旅人を守るために村境などに祀られた神である。

「さいど」、「さえど」などの地名は、この神が祀られた場所と考えられている。ここの賽戸神の由来は不明だが、清掃が行き届き、ミカンなどがお供えされていて、今でも大事にされている様子だ。(M.S)



境内の真ん中を川が流れる

氷取沢神社

磯子区氷取沢町二二一



笹下釜利谷道路を金沢区方面に向かい、「氷取沢」交差点を過ぎてすぐ右側が氷取沢神社だ。道路に面して、大きい社号標が立っ



庚申塔が祀られている祠

ている。広い間口を入ると、右に町内会館としても使われている社務所。左は消防団の倉庫で、地域に密着している様子がよくわかる。その倉庫の裏手に、こんもりとしたサザンカがあるので気がつきにくい、しめ縄が張られた木製の小さな祠がある。中には、文化 4（1807）年の庚申塔が。かつて、氷取沢市民の森「氷取沢～いっしんどうルート」にある電波塔の前の林にあったものだという。その辺りの尾根道は、昔、近隣の馬を集めて競争させる行事をしていたので、馬かけ道と呼ばれていたそうだ。扉からのぞいて見ると、舟形の石に手を合わせた人が浮き彫りにされているが、

風化が進み詳しくはわからない。

広場の中央には鳥居、その左手前には手水鉢がある。鳥居はまっすぐ社殿へと向いている。しかし、その間には朱塗りの欄干のある橋がある。下は大岡川だ。川が境内の真ん中を流れる神社はそう多くはない。大岡川は、氷取沢の山の中に源流がある。はじめはチョロチョロとした流れだが、この辺りまでくるとすっかり川になっている。地元の人、神社を境に、川の上流方向を「カミ」、下流方向を「シモ」と呼んでいたそう。



橋の下は大岡川

橋を渡ると、左右に石灯籠がある。裏に刻まれた文字によれば、昭和 10（1935）年に結婚した谷夫妻が、結婚 50 周年を迎えた記念に昭和 60 年に奉納したという。階段を上った所にある狛犬は、右が鞆を持った阿形、左が子連れの吽形だ。「磯子区氷取沢町 金子忠三郎」（氷の字が永になっている）という名が彫られている。よく似た狛犬が岡村天満宮にもある。岡村の狛犬は、右が子連れ、左が鞆を持つという違いはあるが、同じ金子忠三郎氏の^{ほうげん}奉獻である。岡村天満宮の杉原宮司が、ここ氷取沢神社も兼務しているので、そういったご縁を見てとれる例だ。

正面は社殿。広い敷地の左側には境内社のお稲荷さん、右側には天照大神が祀られている。明治 45（1912）年、上笹下六か町の神社は栗木にあった日枝神社に合祀され上笹下神社となった。その時に、同じように氷取沢村の鎮守だった荒神社と神明社も





朱塗りの欄干のある橋の奥に社殿が見える



昭和 30 年代の氷取沢橋 (『浜海道Ⅱ』より)

間にトンネルを通し大きな道にするために、川筋を変える工事も行われた。結果として、境内の真ん中を川が流れることになったのだ。それまでは、この辺りはのどかな農村で、家は 25 軒ほどだったそうだ。バスが通った頃から宅地開発が進み、新しい住民が増え続けている。



平成 31 年の夏

合祀された。戦後の昭和 22 (1947) 年、旧社地に社殿を作り、地名をとって氷取沢神社とし、神明社も天照大神として境内に遷座したそうだ。その時、神社があった場所はもっと山の上だったという。土地の人によると、上中里神社のように 100 段ほどの階段を上った所にあったそうだ。昭和 30 年代の根岸湾埋め立てで大量の土砂が必要になり、氷取沢の山も切り取られ、今のような平地になった。神社も当然移転しなければならなくなった。

またその後、昔は山で行き止まりの一車線だった道を、笹下釜利谷道路として金沢区との

年間行事は、1 月 2 日の新年祭、9 月 15 日近辺の土日に開催する例大祭がある。その時には、兼務の岡村天満宮の杉原宮司が来て神事を行う。昔は、農村では当たり前だった豊作を願う春祭りや、害虫駆除の虫送りなどの行事もあったが、今は廃れてしまった。

年間で最大の行事である 9 月の例大祭では、土曜日に宵宮を行う。境内で盆踊りをし、町内会の夜店が出る。お参りに来る人の途切れはない。日曜日は本祭で、神事を^{なおり}行い直会^②をする。その翌日は片付けだ。

神輿は、大人神輿と子ども神輿があるが、20 年ほど前から巡行していない。拝殿内の押し入れで保管し、ときどき虫干しをしている。大人神輿は、85 年前に上笹下六か町で一緒に作ったもの。戦前は、六か町がそれぞれの神輿を栗木に持って行って集まったそう。その少し後に、多額の寄付が集まったので、四面すべてに彫刻がある立派な子ども神輿も作った。大人神輿はアバレミコシとも言われ、巡幸の途中で、寄付額の少ない家の塀や生垣を蹴飛ばしたり、川に入って水に漬けたりしていた時代もあったという。

お囃子^{はやし}は、昔からの住民で協力して道具を揃え、杉田商店街まで出かけて行って演奏したこともあったが、今はすっかり廃れてしまった。ただし太鼓は今もあり、盆踊りの時には使っていて、いつかお囃子会を復活させたいと願っている人もいる。

昔は娯楽が少なかったので、とくに子どもにとっては、ご馳走が食べられたり、お小遣いももらえたりするお祭りが数少ない楽しみだったそう。学校の先生も、お祭りの日は早く帰ってよいと言うぐらい、地域の一大イベントだったわけだ。色とりどりの浴衣を着た子どもたちが集まって来て、大人たちが夜店でもてなしている姿を見ると、今も昔も変わらない、地域の大切な交流の場であることが感じられる。



平成 31 年の祭礼

②祭事が終わってのち、供え物の神酒・神饌を下げて酒食する宴

ちょっと寄り道

絶景スポットにある岩船地蔵

「能見台入口」交差点から坂を上り左折。氷取沢高校正門を通り過ぎ、校庭に沿うように再び左折し階段を上る。校庭の中ほどまで来たら、右に見える長い階段を上ると「かねさわ道」の旧道だ。金沢区富岡側は大規模な宅地造成で失われてしまったが、この尾根道には昔の雰囲気が残っている。右側は見晴らしがよく、富岡の町並みが一望でき、遠くには海も見える。

少し下った左側の土手に、赤いお堂に収まった岩船地蔵がある。年号は欠けてしまっているが、干支から享保四（1719）年とわかる。大事にされているようで、きちんと石段が作られ、花などが供えられている。『磯子の史話』によると、この辺りの字名は干花といい、この地蔵は、浜の人々が航海安全を祈願し、また、イボ取りにも効果があったそうだ。今でも通りかかって手を合わせる人は多く、近所の人の散歩道になっている。（M.S）



壹十五の神社と祭り

令和 2 年度（2020 年度）

杉劇アート de 伝承プロジェクト調査・記録プログラム報告書

発行日 令和 3 年 3 月 1 日

企画・発行 横浜市磯子区民文化センター杉田劇場

〔公益財団法人横浜市芸術文化振興財団／特定非営利活動法人チーム杉劇／有限会社アイコニクス／株式会社ニックスサービス共同事業体〕

助成 一般財団法人 地域創造

住所：〒235-0033 横浜市磯子区杉田 1-1-1 らびすた新杉田 4 階

電話：045-771-1212 FAX：045-770-5656

E-メール：sugigeki@yaf.or.jp URL：http://WWW.sugigeki.jp
